

平成 25 年度 第 4 回浦安市文化財審議会議事録（議事要旨）

1 開催日時 平成 25 年 11 月 20 日（水） 午前 10 時～12 時

2 開催場所 郷土博物館 視聴覚室

3 出席者

（委員）平野委員長、平野（敏）副委員長、杉山委員、森田委員、丸山（光）委員、丸山（純）委員、吉田委員

（事務局）石川生涯学習部長（途中退席）、加藤生涯学習部次長、飯塚館長、斎藤主幹、島村、林（記）

（傍聴人）なし

4 議 事

- (1) 「農業調査報告書」についての意見聴取
- (2) 旧宇田川家住宅外壁改修工事についての報告
- (3) 博物館屋外展示場屋根瓦補修工事についての報告
- (4) 浦安の近現代史に関する調査研究について（吉田敦委員による発表）
- (5) 「収蔵品展」の視察及び意見聴取
- (6) その他

5 会議経過

会議に先立ち、平野委員長、石川生涯学習部長があいさつを行った。

(1) 「農業調査報告書」についての意見聴取

事前に配布した「農業調査報告書」について、意見をいただいた。

（委員） 全体を通してのことだが、写真・図・表について、それぞれ整理して、ナンバーをつける必要がある。図と写真については下部に説明文、表やグラフは上部にタイトルをつけるのが、（報告書などの表記としては）一般的である。こういうところの体裁をきちんと整えておくことが、この報告書全体の信用につながる。体裁を整えておかないと、調査内容が良くても軽く見られてしまう。

写真や図表にナンバーをつけるのは、本文に合わせて「この図表・写真をここで見てください」という指示を入れるため。できれば、本文中に「図〇〇参照」などと入れてあげた方がわかりやすい。

（事務局） 図表番号については、全体を博物館でチェックした後、調査者へ戻して入れるようにする。まだ筆者が作図中のものがあるので、すべてが出来上がり次第、確認する。

（委員） 前回も指摘させていただいたのだが、p12 の 15 行目「こうした人口の増加は、耕地面積の減少へとつながっていく」という部分については、どうなったのか？ 私の統計データの調査でも、この負の相関関係が確認できたのだが、結論が出たのかどうか、教えていただきたい。

（事務局） 前回指摘いただいた後、調査者には宿題として伝えてあるが、まだ手がつけられていない、というのが現状である。再度我々もデータを整理した上で、そのデータをここに入れるかどうか、もしくはこの一文を入れるか

どうかを検討する。農業調査はこの報告書で終わり、というのではなく、これから調査をするための基となるものと考えている。今回は、あくまで聞き取り調査を進めたなかでの評価であると、ご理解いただきたい。

(委員) これは、あくまで報告書なのであるから、「今調査をしたらこういう状況でした」という事実をまとめることが目的であって、その要因が何であるかというような分析は、その先の歴史論文の段階になるのではないか。報告書というのは、いろいろな方がこれをもと歴史的なことを考えられるようデータを提供する、ということが主目的ではないかと思うので、(詳細な分析などについては)あまり無理をせずに、刊行することが大切なのではないか。

(委員) 「人口が何人になったから、面積が〇〇になった」というような詳しい数値的なデータは、一般の人が読むには特に必要ないのではないか。

(事務局) 展示などにする際には、「こういうことだから、減っていったのだ」と納得できるように、目に見える形で紹介しようと思っている。

(委員) 明治37年から昭和の初めまで、約40年間の自分が持っている統計の数値データは、いくらでも提供する。そういう数値を研究者が机上でいくら考えてみたとしても、どうにもわからないことがたくさんある。だからこそ、市民の方々からの情報が大切であり、それらの証言がデータを分析・検証する糸口になる。情報提供について、ご協力いただきたい。

(事務局) この報告書原稿のなかから、博物館として委員の皆さんのご意見を確認したいところは何点かありますので、こちらから質問させていただきます。

1点目、p7の堤防について。4行目「一番古い堤防としては、豊受神社東側から北に向かって生子通りに抜ける堤防があった」・14行目「二番土堤が南塚樋の東側から北に向かい」という表現がある。一番土堤・二番土堤は、どこにあったものなのか、古地図などで確認しきれないところがあるため、この表現でいいかどうか、情報があれば教えていただきたい。

(委員) このページ内だけでも、「土堤」と「土手」と、表記が2種類になっている。どちらかに統一した方がよい。また、「三番土堤跡」の写真だが、道が土堤跡なのか、公園の方が土堤跡なのか？ この写真ではよくわからないので、もう少し説明文を加えた方がよいのではないか。

(事務局) 「土手」は、史跡表示板の「三番土堤」が「堤」の字を使っているので、「土堤」で統一させたい。写真については、左側の道が高くつくられた埋め立て部分。説明を加えることにする。

続いて2点目は、p10の17行目「当代島は、葛西の人たちによって開発された土地であると思われる」とあるが、こう言えるのか？

(委員) 葛西の人たちによる開発とは、聞いたことはない。善福寺にある史跡表示板には、行徳の人が開墾した、というような説明が書いてあったと思う。どちらかという、行徳の人とのつながりがある地域という印象がある。

(事務局) 田中十兵衛と狩野浄天による開発と、表示板では説明している。その後、葛西の人たちがワッと入ってきて開墾していったのかどうか、ということであるが。

(委員) 元禄期というのは、どこでもこういう動きがある。もともとの草分け百姓の下にいた隷属的な百姓が、新百姓になって新田開発をしていく、という動きはどこの地域にも見られるので、そういうことではないかと思われる。だから、伝承としてこういう話が出てきたとしても、おかしくはないと思う。

(事務局) 古文書など新たな史料が出てこない限り検証のしようがない部分である。どこから聞いた情報なのかということについて注などで補っておき、調査者の文章は尊重する方向で考える。

3点目は、p142の21行目「こうした状況に伴い、農家の生産意識はすっかり減退して、農地からの転用が急激に増加した」という表現があるが、農業に従事していた方々に対して失礼にあたるのではないかと心配している。町全体の雰囲気として、果たしてこう言えるのかどうか。

(委員) この文章は削除しても、差支えないのではないか。

(委員) 勤める人たちが増えて、自然に農業をやる人もいなくなったということだったと思う。土地改良をした後、区画がしっかりと整理されて、売買もしやすくなった。あえて農業をしなくても済むようになり、土地を売ってしまう方もいた。なかには、なまじ土地改良を行ったがために固定資産税が高くなってしまっただけでとんでもない、と嘆いている人もいた。

どちらがよかったのかということとは言えないが、今思えばあの時期にやっていたらできなかったな、という感じはある。

(委員) 生産意識というものは、計測できるものではないので、難しいと思う。

(事務局) 表現を少し考え直してみたい。

(委員) 句読点が、行の最初に来ているようなところがいくつか見られるので、確認しておく必要がある。

(事務局) 確認し、訂正する。また、聞き取り(語り)の部分ということがわかるように、そういうところは太字にするなど、体裁を整える。

(委員) p33の12行目、杉山委員の語りの部分なので、杉山委員にお尋ねしたいのだが、「父親がにぎやかなの好きだったので」とあるが、「お父さんが、にぎやかなことが好きだった」ということか?

(委員) そうだ。歌とか踊りとか、人が集まることを好んだ父親だった。

※ このほか、会議前に文章の誤記について下記の2点について、委員から指摘いただいた。

- ・P76 下から3行目 「だから作物にんまり栄養を」
→ 「だから作物にあんまり栄養を」
- ・p117 20行目 「女二人兄弟の年上の自分」
→ 「女二人姉妹の年上の自分」

(2) 旧宇田川家住宅外壁改修工事についての報告

配布資料に基づき、事務局より説明した。

(委員) 「シロアリかもしれない」という説明であったが、シロアリだとしたら建物本体が大変なことになってしまうので、早急に専門業者に調査しても

らう必要がある。震災後、復旧のことで佐原で江戸時代の商家・蔵を調査したことがあるが、柱や梁など木材の中がシロアリでボソボソになっていた。素人が判断するのではなく、必ずシロアリ専門業者にお願いすることが大切である。

(事務局) 今のところ、クロアリしか確認していないが、外からでは判断できないので、解体したときに内部をよく確認してみて、必要があれば業者に依頼したい。

(3) 博物館屋外展示場屋根瓦補修工事についての報告

配布資料に基づき、事務局より説明した。

主な質疑・応答は、下記のとおり。

(委員) 検査は、誰かやるのか?

(事務局) 初めに、営繕課が仕様書どおりに施工されているかどうかを検査し、その後検査監理課が細かい点について、契約書類と合わせて詳細に検査する。

(委員) 建物の保存にとって、活用はとても大切なことである。活用していれば、いろいろなことに気付くことができる。住宅は人が住んでいないと傷む、ということと同じである。

(4) 浦安の近現代史に関する調査研究について (吉田敦委員による発表)

吉田委員より配布いただいた資料に基づき、発表があった。

吉田委員の報告の概要

今回の配布資料は、『浦安町統計一覧』に基づき、明治37年から大正15年まで、人口や米の収穫高ほか、浦安の各種物産の数値を表・グラフ化したもの。

物価変動が非常に激しい時代にあたるため、統計一覧に記載された数値のままでは比較しても、意味をなさない。そこで、一度全体を相対化するために、すべてを米の価格を指標にして換算しなおした数値(すべての物価を米価で割る)を入力したものが、今回配布した表である。つまり、すべての項目の生産額を「米で置き換えたらどれぐらいになるか?(相対価格)」ということで計算しなおした数値である。

この表とグラフを見る限り、全体を通して言えることは、大正6年前後に、すべての項目のピーク(最大の生産額)があたっている。つまり、大正6年の大津波(高潮)が起きる直前が、浦安全体の産業のピークであったと言えるのではないか。

前に、「大正6年の大津波の影響はあまりない」と言ってしまったことがあるが、この相対化した数値を見ると、明治44年の高潮・大正6年の高潮・大正12年の関東大震災、これらの災害による影響は大きかったといえる。

「貧しかった浦安」というイメージが強いが時代によっては一概に「貧しい町」とは言い切れないところもあるのではないかと、統計から見えてくる。

他地域のデータと比較してみると、もっといろいろなことが見えてくると思われる。今後の課題としたい。

※ 吉田委員の発表後、質疑応答が行われた。データの数値についての確認や細かい質問については省略させていただき、吉田委員の研究が論文として発表されるのを待つこととする。農業調査に関する質疑応答のみ、議事録に入れる。

(委員) 農業調査報告書にも関わるのでお聞きしたいのだが、米から蓮根へという動きがあったことを前回の会議で伺ったが、統計数値からみると、米をつくるか、蓮根をつくるか、迷っている時期があったように見える。戦後はともかく、戦前は動乱の時期であり、米価が変動する。農家も、米にするか蓮根にするかで迷うことがあったのではないか？

(委員) 戦時中は、供出のために米をつくれと言われた時期がある。戦後は、そういうこともなくなったため、海に近く潮の影響が強い田んぼでは、米ではなく蓮根をつくるようになっていった。

蓮根を作付けしていたのは一部の農家のみで、全体としては7割くらいが稲を作っていた。

(委員) 蓮根に飛びつく、というところまではいかないのですね。

(委員) 米なら日常食べられるけれども、蓮根は時期があるし、それを主食にするわけにはいかないから。蓮根をやるのは、水が深くなってしまって稲作に向かない田んぼになり、やむを得ず蓮根をやる、ということだと思う。どちらかという、米がダメだから蓮根をやる、という消極的理由だったのではないか。

(委員) 特に地盤沈下がひどかった堀江地区では、稲ができなくて蓮根にした、というところが多かった。もともと浦安は農業で生活していた人はほとんどなかった。みんな半農半漁。うちのように純農家といわれるような家でも、行商をやったりして生計を立てていた。農業だけで生活はできない町であった。蓮根の歴史は、比較的浅い。蓮根を掘ったりするのは、専門の職人で、うちでは足立区の方から専門の人を住み込みで雇って行っていた。浦安の人は、作付けなどは行うけれども、掘ったり、出荷したりする作業はやらずに、専門の職人にやってもらっていた。つくる人と掘る人は違う。

(5) 「収蔵品展」の視察及び意見聴取

企画展示室内へ移動し、見学いただいた。

◆ 次回の会議

次回、第5回浦安市文化財審議会は、1月15日(水)に開催する予定である。

以上をもって、平成25年度第4回浦安市文化財審議会は、閉会した。